



ユネスコエコパーク通信

森の復元のカギに 大学院生の研究がスタート

横浜国立大学大学院環境情報学府の堀口悠太さんが、11月1日〜12月8日まで綾町に滞在して森の調査を行いました。

町内の少し高い場所にあるスギやヒノキの人工林は、伐採すると、人工林になる前に生えていたカシやタブノキを



はじめ、さまざまな木が一斉に育ち林をつくりまします。しかし中には、ユズリハだけが占める林がつけられることがあります。厚く大きい葉を持つユズリハが優占する林の中は日光がさえぎられるため暗く、ほかの植物はほとんど育ちません。

堀口さんは、この事例のように伐採後に特定の樹種のみで構成される森林がつけられることに着目し、その原因や仕組みの解明を調査研究していきます。研究成果は修士論文としてまとめられる予定です。

「綾の照葉樹林プロジェクト」による照葉樹林の復元が始まって12年が経ちます。その中で、ドングリのなる木やタブノ

キなどが芽生える数を増やし、確実に育てる方法などを明らかにすることが課題となっています。合わせて、シカの食べないユズリハが伐採初期にいつせいに発芽し、その場所を独占できる要因などはまだ解明されていません。

堀口さんの研究は、先人たちが残してきた照葉樹林を守り、復元を進めるカギとなるものです。また、ユズリハのようなシカの食べない木、成長の早い木とほかの照葉樹が共存できる方法の解明につながる可能性もあります。調査研究は始まったばかりですが、どんな結果が出てくるのか楽しみで

■問い合わせ先

ユネスコエコパーク推進室

☎ 77・3482

コラム タヌキ

平成30年のえとは戌いぬですね。戌年にちなんで、綾に住んでいる野生のイヌの仲間・タヌキを紹介します。

昔話やことわざに登場するほど古くから親しまれてきたタヌキは、ほかのイヌの仲間比べて体がずんぐりしています。小動物や果物など何でも食べるため、人里近くでもたくましく暮らすことができます。たいへん臆病で、少しの物音や光に驚いて動けなくなることもあり、そこから「たぬき寝入り」という言葉が生まれました。一方、不幸にも道路で交通事故にあうタヌキも多くいます。戌年は、この身近な住民も安心して暮らせるよう、安全運転を心掛ける年にしたいものです。

